HAKODATE
函館からトラスト

からつ

Oct.2013 No.31
（最終号）

公益信託函館色彩まちづくり基金が終了いたします

公益信託 函館色彩まちづくり基金（からトラスト）は本年度をもって20年の歴史の幕を閉じることとなりました。
基金終了に伴い、下記の通り報告会を開催することに致します。

●公益信託函館色彩まちづくり基金の活動中間報告会及び記念行事

■日時 2013年11月16日（土曜日） 午後３時（開場 午後２時）
■場所 カフェペルラ(FMいるかビル） 函館市元町 18-11 電話 27-2530 市電十字街下車徒歩７分
■内容 ①第20回助成活動中間報告会＊・・・NPO法人街なかプロジェクト
はこだて外国人居留地研究会 （テーマ・報告内容は5ページに掲載）
②基金終了記念助成団体の発表＊＊
③運営委員の講評と運営委員長の総評
④基金終了記念行事 「公益信託色彩まちづくり基金20年の歩みを振り返って」
スライドによる思い出の紹介・会場参加者を交えてのトーク

＊ 2013年（第20回）助成について
2013年の第20回助成活動報告は、基金終了の為、毎年2月に行っていた最終報告会に代えて、11月16日に中間報告会をさせていただきます。

＊＊ 公益信託函館色彩まちづくり基金終了記念助成事業募集について
7月1日から8月末日まで募集を致しておりましたが、採択の可否は11月16日の運営委員会で決定されます。

●運営委員
◎木村 健一（公立はこだて未来大学 教授）※運営委員長
◎足達 健夫（専修大学北海道短期大学 准教授）
◎小原 雅夫（元町画廊 経営、元 函館中部高等学校教諭）
◎高田 傑（高田傑建築都市研究室 主宰）
◎森下 満（北海道大学大学院工学研究院 助教）
◎戸内 康弘（函館市都市建設部長）

●受託者（活動団体の会計報告書の提出先）
三井住友信託銀行 リテール受託業務部 公益信託第一チーム
〒105-8574 東京都港区芝 3-33-1
電話 03-5232-8908 FAX 03-5232-8919

公益信託 函館色彩まちづくり基金 平成24年度（第20回）助成活動が決定

第20回は２件の助成が決定

平成25年2月16日（土）午後1時から3時、函館市地域交流まちづくりセンター（末広町4-19）において、平成23年度の助成に対する活動の報告が発表されました。スクリーンに写真や説明が映され、楽しい報告会となりました。また、発表に引き続いて行なわれた平成24年度（第20回）助成に応募された団体の活動説明やアピールも行なわれ、その後の運営委員会の審査を経て決定されました。結果は以下の表の通りです。
※運営委員会で話し合われた各助成団体に対する詳細コメントは、ホームページ（http://www.h-nisshou.com/kara/）をご覧ください。

平成24年度（第20回）助成活動の２団体

▶中間報告は４ページに掲載しています。

	申請者	助成希望テーマ	希望金額	助成金額
1	NPO法人はこだて街なかプロジェクト	函館西部地区の景観形成街路沿い商店に屋外看板の提案と実践	1,000,000円	1,000,000円
2	はこだて外国人居留地研究会	「はこだてと外国人居留地 人物編」のリーフレットの発行と、市民向けての調査研究の発表会や人物の業績の探訪会を実施する	410,000円	410,000円
計			1,410,000円	1,410,000円

応募団体への総評

本基金の助成活動が最終回となり、本助成による「多年度にわたり継続的に公衆の目にふれる公益的な場所での実践活動」を行ってきた「NPO法人 はこだて街なかプロジェクト」と「はこだて外国人居留地研究会」の申請を採択いたしました。
両団体の活動は、本助成が標榜する「西部地区の１）建物の色彩や意匠の改善や保全、２）町並みの改善や保全、３）知的財産の発掘と紹介」に寄与する内容であることから、審査会において高い評価を得た。また、活動内容の地域への寄与の大きさを鑑み、次年度以降も自力での活動が継続されることを期待する事となりました。
西部地区の景観を形成する建物や町並みに、具体的に関与して長年にわたり活動を続けることは実に難しいし、手法も多様であることはこれまでの助成対象となった活動が物語っています。本助成の象徴でもあった「ペンキ塗りボランティア」活動が、これまで約40軒の外壁を塗り直し、19年目で終了することなりましたが、その街並に対する熱い思いは、活動に関わった多くの関係者の胸中に強く根付き、次代に引き継がれる事でしょう。
2015年度に予定されている新幹線開通にむかって、函館の街並みに関わる活動は新たな段階を迎えようとしています。類い稀な美しい景観を活かす真摯な取り組みへの期待がますます高まることと思います。

運営委員長 **木村 健一**（公立はこだて未来大学教授）

●●●●● 平成23年度（第19回）助成団体の報告（3件） ●●●●●

2012年の活動報告①

はこだて外国人居留地研究会

リーフレット「はこだてと外国人居留地 町並・文化編」合併号の発行と
研究成果の市民還元のための諸活動（講演会１回の開催と研究発表会４回の実施）

代表　清水 憲朔

活動の目的

私たちは函館の歴史を「生きている歴史遺産」としてとらえており、外国との交流の窓口となった「外国人居留地」を切り口に函館の地域史を研究する市民団体です。函館が好きでリピーターとなってくれる方々、新たな生活の場として函館を選んでくれた「ニューカマー」の皆さんたちの参加も大いに期待しています。隣国のロシアを始め諸外国との交流が進む中で函館市民と共に多様な異文化交流の歴史を学ぶことを活動目的としています。

活動の内容

函館において異文化との遭遇がどのように受けとめられ消化され、自らの財産にしていったかを市民の視点から学びあいます。函館では多くの国際交流団体が活発に活動しています。その一方で開港期のはこだてを包括的に調べ著述されたものがあまりなく、会の研究は史料による基礎的なデーターの収集から出発しました。そのため「からトラスト」による助成金により過去5年間に発行されたリーフレットも史実の紹介が中心となり、なじみにくい内容のものが多々あったと思います。会は昨年発行の「ドイツ・諸外国編」で不十分ではありますが国別の調査を一段落させました。さらに日本の貿易開港が直面したキリスト教文化との対面が函館でどのように行われたのかを研究し「キリスト教編」を発行しました。開港後の日本最初のキリスト教会・ロシア正教会が箱館に開かれたいきさつや、函館のキリスト教の揺籃期から成長期を紹介しました。多くの教会やミッションスクールの誕生のほか、外国人への対応からつくられ近代日本公娼制の始まりとなった「山の上遊廓」の設置も紹介できました。

23年度「からトラスト」の助成事業にエントリーするにあたり、昨年から十数回に及ぶ編集会議を開いてきました。当初会員の清水憲朔から「街並編」「文化編」「アイヌ・千島・樺太編」の3テーマが提案されましたが、「アイヌ・千島・カラフト編」は研究会として避けて通れない重要な課題ではありますが、対象が大きく、かつ会の研究の蓄積が不十分なため今回は見送りました。編集の過程で、①貿易開港後の外国との関わりは箱館ばかりではなく近郊や津軽・南部の町村を周縁とすることで成り立っていた、②開港期から昭和初期にかけ急成長した函館の生き証人に弁天・大町と銀座通りの歴史的な街並がある、③旧市街で一時期また成長期を過ごした多くの人々が街から大きな精神的影響を与えられ、函館から国際的視野をもち全国・世界で活躍している人々が輩出している事などが分かり、函館の街並の発展と西洋文化の受容と函館化の歴史を表裏一体のものとしてとらえ「街並・文化編」を発行することにしました。

津田基氏（写真ギャラリー「モール」代表）の函館の写真史の講演会と、星野裕（安政元年の米露対日本の外交戦）、岸伸子（箱館開港と遊廓）、犬島康文（もっていた男新島襄）、佐藤稔（箱館と渋田利衛門）など会員の研究発表会を開きました。11月10・11日長崎の外国人居留地全国大会の各居留地研究会では清水が「長崎・函館における貿易・外交・信迎と遊廓」を発表、幕末・維新史研究のブラックボックスとなっている安政4年から6年の自由貿易開港までの長崎・箱館の交易会所貿易について報告しました。

活動の成果

「はこだての外国人居留地 街並・文化編」リーフレットB4版8ページ3,500部の発行とホームページによるネット配信を実施しています。また大西剛会員の作製による明治9年の古地図に現在の函館地図を重ねた「歴史ガイドマップ」は西部地区など旧市街地の町歩きや歴史散策の必携ツールとして使われ大きな評判を呼んでいます。

今回のリーフレットの対象範囲は、ゴローニン（ゴロヴニン）事件が解決された文化年間から北洋漁業による函館経済の全盛期となる昭和初期までとしました。合併号は従前の通り全市の高校・大学などの教育施設はじめ、市内・全国の図書館・博物館・居留地研究会などに寄贈しています。今回は発行当初から好評であり頒布の窓口となっている函館地域街つくり交流センターはじめ多くの町並散策会や歴史研究会などの市民団体から求めが相次ぎ発行からひと月の間で2千部が配布、利用されています。

2013（平成25）年2月23日　函館新聞13面

幕末や明治期の街並み、文化紹介

函館の変遷一冊に

サイトでも初公開

はこだて外国人居留地研究会（岸伸一代表）は、函館の幕末や明治期などの街並み、文化を紹介した冊子を完成させ、16日から配布を始めた。西欧文化の受容などで近代都市へと変貌していく姿や様子を評述。インターネットのサイトでも初公開している。（長内　健）

外国人居留地研が冊子

今後の展望

今年会のメインの活動となった「街並・文化編」の編集過程において研究会の会員は多くのことを学びました。会の活動を「地域史の研究のための基礎データーの調査・研究」の段階から「地域史研究による市民活動への参加」へと視野も広めています。

私たちの会は「歴史力」による生き生きした市民生活への寄与も願っています。次年度の「からトラスト」の助成金による活動テーマは「はこだての外国人居留地 人物編」を予定しています。歴史研究は史料が残されている外交の記述や幕府・箱館奉行や開拓使による事績の紹介が中心になりがちでしたが、今回の人物編は既成の評価から離れ、登場する時代背景を明らかにしつつ、為政者中心の記述から様々な立場から時代を支えた人々に焦点をあてた調査と記述にしたいと計画しています。

今後の活動については会員の裾野の拡大に努める一方で調査研究と研究成果の発表の財源を確保するために、公に認知されている機関からの助成金を求めたいと考えています。これまでトヨタ財団からの助成金を原資とし創設された「公益信託 函館色彩まちづくり基金」から、平成19年度から23年度まで5年にわたり貴重な資金の助成をいただきました。また24年度最後となる助成金の交付も既に決定していただき感謝しております。これからも研究会設立当初の理念や目的を忘れることなく活動を続けていきたいと考えています。

前号（No.30）の1ページ「平成23年度助成団体」の記事に一部誤記がありましたので訂正します
はこだて外国人居留地研究会の「助成希望テーマ」
誤）「はこだてと外国人居留地 キリスト教と外国文化編」・「はこだて外国人居留地 北方世界と函館編」の２冊のリーフレットの発行・・・
正）リーフレット「はこだてと外国人居留地　町並み・文化編」の発行・・・

二十間坂友の会・NPO法人はこだて街なかプロジェクト

二十間坂の景観保全と改善に関する住民活動・植樹等で緑豊かな坂道を

代表　広瀬　菊枝

活動の目的

「美しい緑豊かな坂道景観をつくること」
2010年6月、二十間坂を登りきったアイストップに建てられた商店の派手な看板と巨大な工作物、2012年10月には派手な垂れ幕は、西部地区の景観問題として議論をよびおこし、私たち地域住民が改めて坂道景観を見直すきっかけとなった。

2011年3月11日の東北大震災をきっかけとして、自然への備えや配慮と共に地域住民の絆やコミュニケーションの必要性を改めて認識させられた。

二十間坂友の会は地域コミュニティと、人の集う緑の美しい坂道景観の実現を目標に努力していきたい。

活動の範囲

市電通りから二十間坂上正面（元町２－１６）までの車道を除くグリーンベルト部分

活動の内容

【４月】春のグリーングリーン作戦清掃参加（約30名）日曜早朝に準備体操後開始
樹木医斉藤晶先生を迎えての勉強会及び二十間坂の街路樹、修景樹の観察会
【５月】造園業者と会員の勉強会及び打ち合わせ
函館市緑化推進課長と植樹についての打ち合わせ
【７月】オンコ２０本記念植樹（約３０名参加）
【10月】秋のグリーングリーン作戦清掃参加（約８名）
今後の運営についてミーティング（五島軒にてカレー会、８名参加）
【2013年3月】イタヤカエデの補植２本
他「二十間坂友の会だより」の発行　　№11～№16

活動の成果

1. 現在坂道に育っている街路樹（車道）や修景樹（歩道側）の種類と位置の確認。またそれら各樹種の成育状況や幹に発生する傷痕の程度など、一本づつ調査して樹木の現状把握が出来た。観察結果は資料として貴重なものとなった。
2. 植え替えが必要と思われるニセアカシアは外来種問題もあり、将来街路樹の樹種統一を図ろうとすれば、成育状況が良好なイタヤカエデを中心に検討することが無難ではないか。
3. また、補植にあたっては、植桝の大きさ・地下ケーブル線の関係と費用対効果の面からも、街路樹の公共規格に適合した低木の苗木を用いる必要がある。
4. 害虫の発生については、環境に優しい駆除方法についても、検討する必要がある。
5. 肥料木（ニセアカシア）の自然的土壌の肥沃効果が起因しているものとして、植桝帯内ニセアカシア区は成育が良好であり、イタヤカエデ区はやや停滞傾向にある。
6. ニセアカシアやヤチダモは地上施設の支障（交差点の見通し等）を意識して、強剪定の繰返しにより、成長が抑制され、そのストレスにより、根本や幹の一部に古損腐朽が浸食している。そのため１本のニセアカシアを除き、その他のニセアカシアは開花していない。軽い剪定に変えれば、若枝の派生を促し、樹精の活力につながる。
7. 今後、街路樹の樹種を選定する場合の目安は、函館山へと市民や観光客を導く道標樹や前奏樹として、函館山と同じ樹種・郷土樹種（芽吹きが早い・深緑や紅葉が美しい・落葉後の樹形が力強い等）約１７種が考えられる。

今後の展望

2011年と2012年合わせて30本のイチイを修景樹として植樹できたが、今後も適宜な場所にイチイを植樹し、坂道のさらなる修景に努めたい。

また、2013年春に予定しているイタヤカエデ２本の補植をきっかけとして、今後、必要とされる補植のあり方や樹種の選定などに寄与できればと願っている。

友の会発足時以来のアイストップの景観問題は、進展がなく、今も住民や市民の重大関心事である。景観への影響を考慮し、現在の土地、建物を函館市や近隣の観光施設が買い取り、海への見下ろし景観を楽しめる緑豊かなミニパークとして整備すべきではないか。また観光シーズンに混み合うロープウエイ駐車場への入り口の狭い車道部分の拡張もその折に拡幅することが望ましい。

また、冬期間の歩道の問題（アイスバーン時、車進入防止用の石柱ボラードの危険性、手すりの必要性）も含め、市長とのタウントーキングで市長が言及された「ポケットパーク構想」や「ガーデンシティ構想」を踏まえて、グランドデザイン作成参画に向け、関係機関、管理者の土木部、専門家と共に歩みたい。魅力ある坂道景観、生活空間の実現にむけ今後も努力したい。

2012年の活動報告③

ペンキ塗りボランティア隊

谷地頭町商店街の町並み色彩改善Part7 ー町家ペンキ塗りワークショップ・XIXー

代表　石丸 時大

活動の目的

この活動は、谷地頭商店街を対象として、連続する建物の外壁の色を、数年がかりで塗り替えていくことで、町並みの色彩・景観を万人に対してわかりやすい形で改善し、これを通して同地区に住んでいる住民の自らのまちへの思いが活性化することを願い、まちの再生を目指すものです。

活動の内容

ペンキ塗りボランティア隊は、1994年以降毎年活動を行っており、2006年からは、活動の場を谷地頭商店街に移し、「町並みの色彩改善」という活動理念のもとで、谷地頭地区の中心となる表参道と市電通りが交差する部分の建物の外壁の色を塗り替えてきました。

ペンキ塗り替えは今回で第7弾であり、例年通り、背景となる函館山の緑や紅葉に映え、全体として色彩を統一しつつも、それぞれの建物がアクセントカラーを用いて個性を発揮できる、まとまりのある町並みを目指し行いました。

具体的には、塗り替え対象となる建物の選定、塗り替える色の検討、CGによるシミュレーション、シミュレーションに基づく色彩計画を建物の所有者と相談・決定、ペンキ塗り当日に向けた準備（ハケ、ローラーなどの購入、塗料の手配、足場の手配、当日のボランティア活動への参加募集など）という段取りを経て、今年度は、2012年7月21日（土）、22日（日）の2日間で延べ86人の方々に参加して頂くことができました。

塗り替えの対象となった建物は、谷地頭町に拠点を移してから初年度に塗り替えを行った「谷地頭町会館」とそれに隣接する個人住宅の2棟で、今年は雨に見舞われることもなく、地元の学生や地域住民の方々と一緒にペンキ塗りに取り組むことができ、多くの方々の協力に支えられ、無事に塗り替えを完了することができました。

活動の成果

昨年度までの活動により、当初の塗り替え目標はほぼ達成されていましたが、本年度の活動を行うことによって、地区全体としてより調和のとれた色彩とすることができ、活動当初から目標としていた、谷地頭商店街全体としてアイボリーを基調とする外壁の統一感と、アクセントカラーが生み出す建物それぞれの個性が調和した、明るく、まとまりのある町並みを、誰の目にも分かりやすく実現することができたと考えています。

今後の展望

本年度で幕を閉じてしまうペンキ塗りボランティア活動ですが、この活動が地域に何がしかの効果をもたらしたと自負しており、活動を終えることは惜しまれます。しかし、この活動によって、住民の意思で町並みも変えられるということが谷地頭の地域を含め、函館市全体に少しでも広まっていければ良いと考えています。今後は、何らかの異なる形でまた、町並み形成に貢献できる活動ができることを願っています。

「からトラスト」の20年ーアルバムから①

① 2003報告会五島軒王朝の間

②村岡さん

③ニュースレター31号写真

④ 2005 ペンキ塗りモストリー

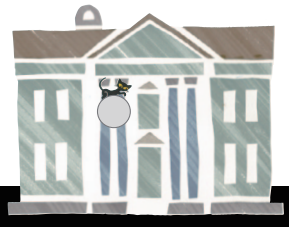
⑤ 2005 モストリーペンキぬり

⑥ 2007函館文学散歩作成

ハリストス正教会

太刀川家

相馬株式会社



旧北海道庁函館支庁庁舎

イラストは2006年助成の「函館建築絵本」からの抜粋

●●●●● 平成24年度（第20回）助成団体の中間報告（2件） ●●●●●

2013年の中間報告①

はこだて外国人居留地研究会

「はこだてと外国人居留地 人物編」のリーフレットの発行と、市民向けての調査研究の発表会や人物の業績の探訪会を実施する

代表　岸　甫一

今年度は、研究会としてより組織的に活動できるよう体制の充実を図りました。

研究会では昨年の応募の段階から、これまでのリーフレット内容が事件を中心に取り扱ってきたので、今回は人物をクローズアップしたいというのが大方の意見でした。清水憲朔会員が応募原案を作成し、助成金交付決定後も引き続き清水案をベースにしながら9月現在まで内容検討を進めてきました。清水案の編集プランでは、「函館は特異な歴史をもつ街です。二度幕領地で開港場となり幕府終焉の地そして北海道開拓と北洋漁業の基地として発展する。近代都市函館の生誕から成長の物語を節目の時代に活躍した人物から読み説いてみたい。」という基本方針から「“官”から“市民”誕生の時代へ」というコンセプトで、転換期の人物像を中心に多様・複層的にとりあげるという壮大な内容です。人物というこれまでとは異なる扱い方の問題もあり、ようやく人物を絞り込む段階にきたところです。10月から執筆の段階に入ります。年度末の完成にむけて清水編集長を中心に鋭意取り組む覚悟です。

本来の研究会らしい活動として、会員による研究報告会や講演会を定期的に開催しています。今年度は5月11日、倉田有佳「ロシア帝国時代最後の在函館領事E.レベデフ」、6月22日、加藤清郎「日魯漁業の歴史と函館」、7月27日、田村和子「相馬藩の北海道開拓と紺野治重」を実施しました。今後も9月～11月の毎月1本の研究報告を予定しているので、市民にも案内したい。

昨年度の活動報告でも清水会員が述べている通り、「公益信託 函館色彩まちづくり基金」終了後の新たな助成金の応募を模索しています。そのための一条件として研究会のNPO法人化に向けた方向も会員の共通認識となっています。

我々研究会は、この5年半、「からトラスト」基金のリーフレット作成を軸に活動を展開してきたと言っても過言ではありません。その意味から、これまで我々の研究会活動を支えて頂いた「公益信託 函館色彩まちづくり基金」には万感を込めて感謝の意を表したい。誠にありがとうございました。

2013年の中間報告②

NPO法人はこだて街なかプロジェクト

函館西部地区の景観形成街路沿い商店に屋外看板の提案と実践

理事長　山内 一男

4月27日、重要伝統的建造物群保存地区に指定された川越街道沿いの街並みの屋外広告物視察に出かけ、函館西部地区に相応しい看板は何かを探る。視察して言えることは、看板の大きさは控えめ。昔ながらの瓦屋根平入り大きな看板は、色彩が抑え目。看板の取り付け高さは、歩く人の視線を意識した高さであり建物の大きさで違っていた。洋館であっても蔵の軒の高さより下に取り付けていた。

視察を参考に会議を重ね、5月18日函館西部地区景観形成街路沿いの商店街の看板やサイン調査を行う。調査した商店には、からトラストの助成金で活動し、看板調査の趣旨と看板製作の公募やワークショップの案内をお知らせした。

▲川越街道沿いの洒落た看板

▲街なかの看板調査写真

調査のまとめを踏まえ8月17日ワークショップを開催、会員外11人の23人が参加、3グループにわけて開始。西部地区の街並みのイメージを言葉にし、調査した看板の大きさと色彩・彩度を視覚的に分類させ、相応しい看板を3グループごとに選び出した。その結果は川越街道沿いの大きさや色彩が控えめの似た答えが出てきたが、アクセントとして彩度の高い色彩をピンポイントで使用する看板も、開港の函館には受け入れられるようである。

看板公募の締め切りは9月17日。8件の応募が事務局に届いた。19日会議にて8店舗の9月25日現地視察を決定し、看板製作をする候補店舗を選び担当者を決定した。これから商店主と相談しデザインの一歩を踏み出すところである。

10月22日、北海道大学大学院工学研究科准教授 小篠隆生先生の看板の役割と街並みについてセミナーを開催し、西部地区に似合っている看板の製作を一層進めたいと考えている。

▲看板と景観ワークショップ

公益信託函館色彩まちづくり基金終了について

■ご挨拶　　運営委員長　木村 健一（公立はこだて未来大学教授）

元町倶楽部の活動が広く全国的に知られるようになる『建築の彩時記 港町・函館こすり出し』がINAXブックレットとして1990年に刊行された衝撃は大層なものだったと記憶しています。

巻頭で荒俣宏氏は「こすり出し一都市の剥ぎ方をめぐって」という一文を寄せて、当時脚光を浴びていた「路上観察学」の「おそらく初めての地方版といっていい」と述べた上で、「独自性をもった方法論を出した」と評し、何かしら先を越されて悔しいというような気配を滲ませていました。同書には、CGによる色彩変遷の分析や塗料そのものの成分分析など、極めて学術性の高い論文も掲載されており、函館の西部地区の景観を理解する上での重要な基本文献になっています。

縁あって私は函館に赴任する前年の1999年、じろじろ大学に招かれた際に、この話をしました。村岡さんは、「いや、そうではなくて、元町倶楽部のこすり出しは、西部地区の建物に触発されたごく自然体の活動だったんです」という反応。

共通の趣味・興味を持つ仲間が定期的に集まって形成する緩やかな集まりの中でおこなわれた町並みに対する必然的な成果なのだ、というのでした。

元町倶楽部は本来の意味の「クラブ」であって、やや、気合いの入った気配を感じさせる全国の町づくり団体とは一線を画しているということが良くわかるのでした。

しかし、元町倶楽部の活動を端緒にし、トヨタ財団の研究コンクールの最優秀賞を得て作られた「函館色彩まちづくり基金」は、函館でまちづくり活動に取組もうという様々な試みを支援し、育てて行く強力な存在になります。単に「熱く語る」というような事が、当たり前のように思えてしまう「町づくり活動」の印象を覆す、凪のようなしぶとい感じ。本当の意味での「熱さ」が通奏低音のように流れている。この熱さは、献身的に支えてきた事務局の河内さんと陳さんらの静かな情熱による、ということを忘れてはならないのです。

今回、本基金が終了するにあたって、ニュースレター「から」の全号を読み直す機会を得ました。毎年行われる採択者の活動報告には、初期には調査研究が多いのですが、常に実践的な活動が過半を占めているのが特徴です。前半の活動の成果をふまえ、最後期には基金終了後も継続、展開するであろう内容に変化していきます。

元町倶楽部の成した「町づくり」へのとても熱い情熱（あえてそう言わせて頂きます）が、今や当たり前のようにそこに存在する「美しい西部地区」の持続可能性につながって行く事がなによりです。基金の終了に立ち会う者の一人として、そういう思いにとらわれています。

旧ロシア領事館

■特別寄稿　　元町倶楽部　山本真也

「元町倶楽部の山本」を名乗るのは久しぶりだ。もともと元町倶楽部（1986年～）は会費会則のないアメーバー状の組織で、代表の村岡武司氏にも誰が会員か判然としない。ただ草創期の元町倶楽部には、ユニオンスクウェア（現、明治館）のカフェバーに集まるコア・メンバーがいて、そのメンバーと北大建築工学科ＯＢなどで結成したのが「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会（1988～1993年）」。この会による市民研究活動「港町・函館における色彩文化の研究ー下見板のペンキ色彩の復原的考察を通してー（1988年～1991年）」が、その後の様々な活動の源流となり、私も一会員としてその中にいた。

「こすり出し」に「時層色環（じそうしきかん）」・・・。これらの言葉を懐かしく思われる方や、もはや知らない方もいると思うが、これらをキーワードとしながら私たちは、函館・西部地区の街のなかで建物外壁のペンキこすり調査を行っていた。皆まだ若かった。私で30代半ば、村岡代表もまだ40代半ばだった。

当時、西部地区においては「高層マンション建設問題（1990年）」が街全体を大きく揺り動かす社会問題になっていて、仲間もそれぞれの立場で苦闘をしているなかで続けた活動だったが、この研究自体はワクワクするほど楽しかった。新たな発見に満ち、何よりもこすり出された色の年輪（時層色環）が美しかった。研究資金もトヨタ財団の研究コンクールに入選したことで助成を得ながら進めることができ、ビールの一杯や二杯多く飲めた。

結果としてこの研究活動は、1991年、トヨタ財団主催「第5回“身近な環境を見つめよう”研究コンクール」において最優秀賞を受賞する。賞金100万円は一晩で消えた。研究活動の借金の返済もあったが、東京で行われた授賞式には12名もが参加して、一晩騒いで・・・消えてしまった。でも、そこは天下のトヨタ財団。最優秀賞受賞者には、継続的な研究で1,000万円、拡大して事業を展開する場合には2,000万円の研究奨励金を出してくれるという。当然、元町倶楽部は拡大型を選択するわけで、その事業として、自らの手による「まちづくり公益信託」の設定を構想することになる。

高層マンション建設問題のなかで皆が感じていたのは、地域の環境の変化が、住民や市民の手の及ばないところまできていることだった。もう一度、街と市民の有機的な関係を回復するためには、再び市民の手の届くところから、市民が主体的にまちづくりに関わっていく熱意の掘り起こしと、支援の仕組みが必要と考えたのだ。

1993年は、元町倶楽部にとって大きな転機の年になる。この年から元町倶楽部の活動は、大きく二つの柱を持つことになるのだ。

一つは、ＦＭいるかの定時番組（毎週日曜日20～21時）「元町倶楽部のじろじろ大学（1993～2007年）」がスタートしたこと。コミュニティカレッジ「じろじろ大学」は、この番組を中心に様々なイベントをかみ合わせながら展開し、じろじろと街や人を探索し、街の魅力を学ぶ。「まちはキャンバスでありキャンパスである」というのが建学の精神で、地域文化の掘り起こしと人的ネットワークの拡大、そして新たな地域文化の創造へと膨らませていこうとする活動だった。14年間、放送回数693回にもおよぶものとなったが、多くのリスナーに惜しまれながら2007年9月30日が最終講座となった。（村岡さん、太田さん、改めてご苦労様でした）

もう一つは、前記の研究奨励金2,000万円を原資とし、元町

倶楽部・函館の色彩文化を考える会が委託者となって、全国初の市民グループによるまちづくり公益信託「函館色彩まちづくり基金（函館からトラスト）」が誕生したこと。じろじろ大学が「市民活動の掘り起こし」とすると、函館からトラストは「市民活動の支援の仕組み」に位置づけられ、市民活動体が市民活動体を支援する財布を持ったという意味でも画期的だった。さらに、市民活動体の相互交流を促し、新たな市民活動を創造し、将来的には、まちづくりの情報やノウハウを市民レベルで獲得する、市民の手によるまちづくり情報センターづくりまで構想していた。

この函館からトラストについて、村岡代表は、「街から得たお金は街に返す」あるいは「元金には手を付けず、その利息を街の未来に投資する仕組み」と表現している。

宣　言

この函館の街に住み続けた多くの人々がいました。

豊かで美しい環境に住みたいと願い続けてきた人達の強い明確な意志を学ぶ事が出来ました。

この志を継承し、市民の市民による市民のための街つくりを目指し、公益信託函館色彩まちづくり基金が活動を開始した事を宣言します。　1993年7月3日

これは、村岡代表が毛筆で書き上げ、函館からトラストの設定記念式典（金森ホール）で読み上げられた宣言文だが、基金の趣旨や委託者としての想いをよく表している。

それからちょうど20年が経過し、いま、函館からトラストはその幕を閉じようとしているわけだが、その間、本当に多くの人たちにトラストの運営にかかわっていただき、また多くの市民活動がトラストの助成を活用して活発に展開されてきた。関係された皆さんに、心から感謝いたします。（河内さん、陳さんには、大変ご苦労様でした）

当初構想したことが、充分に展開できたわけではないし、これまでの活動の評価もいずれ別の場でなされるだろうが、いま、市民活動支援という意味では「函館市地域交流まちづくりセンター（2007年～）」が、指定管理者にも恵まれ、市民サイドに立った視点で、私たちが構想したものに近い活動を展開してくれるようになってきている。ペンキこすりから始まった私たちの一連の挑戦も、ここらで幕を閉じてもいいのだと思う。

最後に、2,000万円の原資で20年間も楽しませてもらったのだ、原資をいただいた函館・西部地区の街には、改めて深く感謝しなければならない。ありがとうございました。

（函館市教育委員会　教育長）

■特別寄稿　　森下　満（北海道大学助教）

函館西部地区と私

1.はじめに

函館からトラスト事務局より、「今までのペンキ塗り活動（きっかけから）を始めから参加し、最後まで見守ったものとしての思いや感想を・・・これはペンキ塗り活動の総締めくくりとしてお願いします」という依頼があった。

函館西部地区でペンキ塗り活動を初めておこなったのは1990年だが、私と西部地区との関わりは、すでにその13年前の1977年からあった。私にとって、1977年から最後のペンキ塗り活動の2012年までの35年間、西部地区との濃密な関係はずっと連続している。

少し長くなるかもしれないが、1977年から話を始めさせてもらいたい。

2.北大足達研究室による町並み・住宅・生活環境の調査研究：1977年～1987年

私が所属していた北海道大学工学部建築工学科住居地計画学講座の初代教授・足達富士夫先生が、北海道大学に着任されたのが1974年4月のことで、ちょうど1年後の1975年に私は助手に採用された。最初の2年間は、研究室として札幌市圏域の住宅の調査研究をしていたが、1977年6月に初めて函館市西部地区の町並み調査をおこなった。研究室総出で、足達先生と私、大学院生7名、4年目の学生10名の総勢19名で、一週間ほど滞在して、町並みの連続立面や住宅平面・立面の記録作業などをおこなった。

足達先生は、奈良県橿原市今井町の町並み調査を手がけられ、海外、とくにフランスの町並み保存に造詣が深く、日本の景観研究の第一人者であった。北大に着任された1974年に一度函館を訪れたそうで、すでにその時、西部地区の町並みの特色と価値、生活環境の問題点と課題、将来のあり方について、持ち前の鋭い洞察力で看破されていらっしゃったと思われる。足達先生にとってこの1977年の調査は、その確認と、客観的なデータの収集、記録にとどめることが目的だったのではなかろうか。翌々年の1979年にはB5版・40頁ほどの冊子「函館の地域文化財」としてまとめられ、研究室で自費出版をされている。

私にとっては函館西部地区との最初の出会いである。西部地区のような歴史的な町並み自体が初めての体験だったので、見るものすべてが珍しく、浮き浮きした気分で、楽しんで調査した、という記憶がある。この時の学生の一人が山本真也（現函館市教育長）君であるが、彼にとっては、その後の人生を大きく左右する、幸せな出会いになったといえよう。

研究室としては、その後10年間ほど、西部地区をフィールドとした研究調査が継続され、より具体的な景観整備、生活環境整備のあり方をさぐる方向へ展開し、毎年数編の卒業論文、修士論文にまとめられている。写真1は、1978年7月、研究室の誰かが調査の一環として撮影した、当時の旧函館区公会堂（1910（明治43）年）の姿で、配色は外壁が淡いピンク色、窓枠・柱型等が白色であった。

写真1　ピンク色と白色の旧函館区公会堂（1978年7月撮影）

私はというと、1978年から、北大同期生の柳田良造、石塚雅明両氏に誘われて、小樽運河の保存運動に身を投じるようになり、函館との関わりは一時中断する。それが復活するのは、1982年と83年の2年間にわたる、伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に関する調査であった。この時は北大の足達研究室と越野研究室の合同で、30名をこえる大調査団でおこなわれたのではないかと思う。これらはそれぞれ翌年、調査報告書としてまとめられ、1988年の函館市西部地区歴史的景観条例の制定へとつながっていく。条例制定後、歴史的景観地域の指定、景観形成基準の設定、景観形成基本計画の策定、デザインガイドラインの作成など、一連の実質的なワークは、函館市の委託を受けて柳田石塚建築計画事務所がおこなうことになるが、私もそれに協力し、一緒に作業をしたことをよく覚えている。

3.元町倶楽部との町並み色彩ーこすり出しと時層色環ーの研究：1988年～1990年

その頃、同時並行的に手がけたのが、元町倶楽部との町並み色彩研究である。これはトヨタ財団の“身近な環境をみつめよう”第5回研究コンクールの研究助成を受け、1988年4月から1990年10月の2年半にわたりおこなったものである。柳田、石塚両氏と私の3人は、この3回前の第2回研究コンクールに、小樽運河保存運動をテーマとする研究助成を受けて最後の研究報告会までいったが、最優秀賞を獲得することはかなわず、

函館で再挑戦、という意味合いがあった。

当初、柳田氏と私は西部地区の景観整備が軌道にのったので、次なる課題の住宅・住環境整備に関することをテーマにしようと主張していた。しかし石塚氏が、それはオーソドックスすぎておもしろくないのではないかと疑念を呈し、直感的におもしろそうな、まだどこも、誰もやっていない「ペンキ色彩」をテーマにするのが良いのではと反論し、まとまらなかった。地元の函館、元町倶楽部にもちかけたところ、とくに山本氏がペンキ色彩に賛同してくれ、元町倶楽部としてもそれでまとまり、ペンキ色彩でいこうということになった経緯がある。この研究はねらいどおり最優秀賞を獲得したが、その真の功労者は、最初のアイデアを提供した石塚氏と、その後押しをした山本氏の両氏といえるかもしれない。

研究の応募申請書には、旧函館区公会堂が1982年に保存修理工事がおこなわれて、写真1の淡いピンク色と白色から、現在見るような外壁がブルーグレー、窓枠・柱型等が黄色の鮮やかな配色へと復原されたことを引き合いに出して、かつての西部地区には今とは全く異なる町並み色彩が形成されていたのではないか、と記述し、アピールしたが、実際のところは半信半疑であった。それを払しょくしたのが、忘れもしない、1988年6月4日、旧大町郵便局（1911（明治44）年）の柱型のペンキ塗膜をこすり出してあらわれた、写真2の時層色環である。これを見て、この研究はきっとうまくいく、という確信が得られた。1990年当時、私は38歳であったが、この研究で最優秀賞を獲得したことは、いまでも人生の中で最も大きな達成感、充実感が得られた出来事であった。

写真２ 旧大町郵便局の柱型の時層色環（1988年6月4日撮影）

4.ペンキ塗りボランティア活動の展開と函館からトラストの設定、その終焉：1990年～2013年

町並み色彩研究の終わりころ、成果を反映した実践的な活動をしようということで、その一つとしてペンキ塗りを企画した。こすり出しをおこない、外壁と窓枠または柱型の時層色環を採集した85件の洋風下見板張り町家の中からペンキ塗り対象物件を選ぶにあたり、こんなエピソードがあった。研究調査の一つとして、町家の住人や所有者から色の塗り替え時期や選択理由などを聞いてまわったが、その中の加藤さんという方が、某デベロッパーから住宅・土地の売買を持ちかけられ、悩んでいるという話があった。加藤さんは一人ぐらしのお年寄りであるが、亡くなった連れ合いとの思い出がたくさんつまっている家と場所をできれば離れたくない、という思いがあったようだ。もし売却されたら、更地にされてマンションが建てられるだろうと予測された。それで加藤さんをなんとか元気づける手立てとして、このお宅のペンキ塗りをしようということになったのである。

1990年8月、初めてのペンキ塗り活動が加藤家住宅でおこなわれた。写真3は、その時の記念写真である。黄色いポスターには手書きで、街の色彩・ワークショップ函館、町家ペンキ塗り替え実験、とある。（写っているのは、地上に森下、1段目の足場に河内、太田、村岡、2段目に陳、柳田、渡辺の7名で、撮影者は山本か？）この活動によって、加藤さんはこの家を売ることなく住み続け、結果として町並みも維持できたのであった。住民・市民・サポーターによる1軒の住宅のペンキ塗りはささやかな

写真３ 初めてのペンキ塗り・加藤家住宅（1990年８月19日撮影）

手作りの活動だが、それが集積されれば町並みの保全と再生も可能であることを実感した。

その後、1993年に「公益信託函館色彩まちづくり基金（愛称、函館からトラスト）」が設定されるが、その時の記念行事の一環として2回目のペンキ塗り活動がおこなわれた。翌1994年から「函館からトラスト」の助成が始まり、以降2012年まで毎年、ペンキ塗り活動は助成金をもらって継続してきた。土・日曜日の2日間をかけておこなわれたこの活動は23年間で全21回、ペンキ塗り建物は全45軒。この45軒の建物の所有者の賛同がなければ、この活動は日の目を見なかったはずであり、なによりもまずこれらの方々に感謝申し上げたい。

活動の参加者は、1990年の元町倶楽部1団体の30代、40代の11名から始まったのが、2012年では地元の北海道教育大学函館校のまちワーク研究室及び山本ゼミ、はこだて未来大学、函館工業高校、札幌の北海学園大学、北海道大学の学生・生徒さんの20代前半から10代後半の56名へと大きく若返り、増加した。全参加者数は883名、2日間の延べ人数だと1,300人を超えるものと思われる。これら1,000人以上の参加者にも感謝したい。

写真４ 最後のペンキ塗り・谷地頭町会館（2012年7月22日撮影）

5.おわりに

こうして振り返ってみると、函館西部地区のまちづくりに関わった人々の多様さとそのエネルギーの膨大さがよくわかる。ペンキ塗り活動は、その一部にすぎないが、象徴的な活動でもあったと思う。基底には、多くの人々を魅了してやまない、西部地区という場所の価値がある。1977年に出会えて、35年間の長きにわたり関与し続けられたことを幸せに思うし、誇りにも思う。この西部地区という場所の価値は、そこに住み、日々暮らしている住民や函館市民の方々によってつくりあげられ、維持されているものである。主役は常に地域住民であり、函館市民であり、私や北大等の札幌勢はあくまでもサポーターにすぎない。

ここで忘れてはならないのが故田尻聡子さんの伝説的な行動である。1977年、旧北海道庁函館支庁庁舎（1909（明治42）年）が札幌郊外の開拓の村へ移築されようとしていたことに対して、間髪をいれずに、北海道新聞の読者の声欄に投稿し、現地での保存と修復を訴えた。これを契機に、1978年5月、函館の歴史的風土を守る会（歴風会）が設立され、田尻さんは副会長としてご活躍されたのであった。結果、旧北海道庁函館支庁庁舎は元町公園内の現地に保存され、北海道指定の有形文化財にもなった。この田尻さんという一市民による、函館での最初の町並み保存、まちづくり運動の成功体験は、きわめて大きなものがあり、その後の市民運動に対しても良い影響を及ぼしたといえよう。それはまた、地域のまちづくりにおいて、

一人の力では限りがあるが、その一人から何かが始まり、大勢の人を巻き込み、そして変わるのではないか、ということが象徴的にあらわれていると思うのである。

ペンキ塗り活動は2012年で、函館からトラストも2013年11月で終わることになるが、いずれ函館市民の誰かが新たなまちづくり活動を展開するであろう。函館では、田尻さんと歴風会以降、元町倶楽部のさまざまの活動、最近のバル街など、連綿とつづく市民まちづくり活動の歴史があるのだから。

■特別寄稿　　松下 重雄（金沢大学　地域連携推進センター　准教授）

函館ペンキまちづくりをふりかえって

いまは蕎麦屋になっている大三坂の木造民家に活動拠点を置き、函館市西部地区のペンキで塗られた建物の壁をサンドペーパー片手に夢中でこすっていたのが、私の大学院生時代の楽しい思い出である。色の環になって出てきたペンキの層はとても不思議で美しく、それを「時層色環」と命名する場面にも立ち会うことができた。北海道を離れることになったため「函館からトラスト」のしくみづくりそのものには深く携わることはできなかったが、それまでの一連のまちづくりプロセスに身近に関わることができたことは、とても刺激的であり私の財産になっている。

大学を卒業してからもまちづくりの分野に進んだ私は、函館からトラストを取り巻くまちづくりを勝手に「函館ペンキまちづくり」と呼び、常にそれを目標に現場で活動を企画実践してきた。そして、いまだに、それを超えられないでいる。また、まちづくり関連の科目を大学でいくつか担当しているが、それらのすべての最初の授業で、必ず函館ペンキまちづくりを採り上げ、これが自分の原点であり、日本の地域協働（パートナーシップ）によるまちづくりのモデルであることを学生に紹介している。受講生からは、その最初の授業が一番おもしろいと言われているのが、やや問題ではあるが。

函館ペンキまちづくりは、街の色彩変遷についてペンキを取り巻くさまざまな要素を紡いでいく活動で、その謎解きの過程自体が非常に知的で興味深いものだった。たとえば、街の塗料店のオヤジさんにペンキの流行色についてうかがったり、郷土史家には戦時中の迷彩に関する裏づけをうかがったり、地域のさまざまな人を巻き込んで謎解きがおこなわれた。さらに、函館の町並みが描かれた美術館の所蔵品を調べたり、北大の化学系の研究室に塗料の成分分析を相談したり、大阪にある大手塗料会社本社を訪問したり、多くの専門機関が関わり、今風に言えば、学際的な研究や多様な主体の連携によるまちづくり活動が自然に実現されていった。

このように函館ペンキまちづくりには、市民主体のまちづくりに求められる手法の多くが包含されていた。たとえば、まちを市民で巡り歩くフィールドワークや壁面をこする参加体験型のワークショップ、調査研究やまちづくり活動の成果を市民に伝えるシンポジウムの開催やニューズレターの発行、CG技術を駆使した専門的でわかりやすい町並み色彩の変遷シミュレーション、市民と専門家や大学・行政との連携体制の構築、民間助成金を活用した活動展開などである。私にとって、プロセスが大切だというまちづくりの価値観と現場感覚は、ここで培われた。

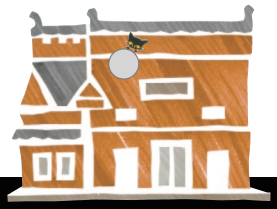
こうした活動全体を絶妙に操っていたのが「函館元町倶楽部」の面々である。当時若造の私からみると、いかしたオジさまとオネエさまからなる、じつに怪しげでお洒落な集団であった。レンガ造の建物の一角をアジトにして、函館のまちづくりについて熱くクールに語り合っていた場面を思い出す。これも今風に言えば、まちづくりNPOということになろう。しかも、現代のまちづくりNPOの分野において、もっとも期待される機能である中間支援機能、すなわち地域のさまざま資源をまちづくり現場でコーディネートする機能を備えていた。そういうことからしても、私は相当先駆的なまちづくりの現場に身を置くことができていたように思う。

函館からトラストは、改めて言うまでもなく、日本ではじめて、かつ唯一の市民主体で設立されたまちづくり基金である。それは日本のまちづくり運動が対立からパートナーシップへとパラダイムシフトしていく過程で、そのあり方を鮮やかにいち早く世に示したものと位置づけることができよう。その約20年におよぶ活動が終わりを迎えるとの知らせ受け、設立以来毎年続けてこられた、北大の森下先生率いる学生によるペンキ塗りボランティア隊の、最後の活動を見学した。この活動が終わってしまうのは少し残念だが、函館からトラストによって育まれた多くの市民活動が、今後も函館のまちづくりを支えていくことを期待する。また、具体的なアイデアはすぐに思いつかないが、私自身も何らかの形で函館のまちづくりに恩返しできればと思う。

さいごに、これまで地道に函館からトラストの運営を務めてこられた事務局の皆さまに感謝申し上げます。

▲文化服装学院前で：こすり出し対象物件の予備調査後の記念写真
建物はこの２日後に取り壊された。

旧函館区公会堂



中華会館

旧函館郵便局

旧イギリス領事館

「からトラスト」の20年－アルバムから②

⑦ 2008 松石さんコンサート

⑧運営委員小山・足達

⑨最後のペンキ塗りアフター

⑩ 2010 空地に花を咲かせよう

⑪こんな町に住みたいな、エッセーコンクール

⑫機関紙「から」1号

編集後記

1993年、日本で初めての民間によるまちづくり基金が設立された。様々な期待を乗せて走りだした青春まちづくり号は、20の駅を通過し、終点駅に無事到着。ご乗車の皆様、お疲れ様でした。

身近な環境を顧み、知恵を出し、汗を流しての活動は、素朴なまちづくり活動の原点でした。活動を通して撒かれた町づくりの小さな種が、函館を担う次世代に受け継がれ、より良い町並みの形成につながることを願っています。今までの活動の中から私にとって印象深い出来事をいくつか記しておきます。

町並みの歴史を多方面から発掘した、はこだて外国人居留地研究会の丁寧なリーフレットは今後、西部地区旧市街のまちづくりの為の貴重な資料となることでしょう。

二十間坂歩道の修景樹のイチイや補植されたイタヤカエデの細い樹木の成長を見るのも楽しみです。建物の色やお洒落な看板も訪れる人の目に留まることでしょう。

元町倶楽部のおひとりでもある、スペイン料理のオーナーシェフ、深谷宏治さんによって2004年から開催されている旧市街地での「バル街」は20回を迎えました。開催当日は和服姿の男女や楽しそうなグループ連れが坂道を行きかい、暖かな雰囲気で溢れます。音楽やダンスなど様々なパフォーマンスも加わり、祭りを盛り上げてくれます。

併せて開かれるようになった世界料理学会も4回目を数えました。各国のシェフたちが、惜しげもなく自身の取り組んでいる情報を発信します。若い人々にとっては見逃すことのできない刺激的な場となっています。「町並み」と「人々の元気な心」が一体となり、西部地区の誇れる宝となっています。

当基金設立時、事務局としてお手伝いくださった歴史文学作家の植松三十里さんは、昨年、箱館戦争を描いた「北の五稜星」を出版されました。今後のご活躍が楽しみです。

最後に、函館のエッセンスでもあり、今後も諸活動の舞台となるであろう西部地区がさらに魅力的な空間として、その存在を主張し続けてくれることを心から祈りたいと思います。

ご応募くださった皆様、活動された団体、ご寄附をくださった皆様、運営委員、委託者、受託者、ご協力いただいた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

2013年10月　　河内 昌子

▲ 新しくニセアカシアの街路樹に補植されたイタヤカエデ

から第31号
発行／函館からトラスト事務局
発行年月日／2013年10月1日　編集／河内昌子
〒040-0001 函館市五稜郭町19-15
Tel／0138-52-8411（日昇商事内）

からトラスト公式ホームページ
http://www.h-nisshou.com/kara/
函館からトラスト事務局、及びからトラスト公式ホームページは2014年３月末日をもちまして、終了させていただきます。